

# 川奥の花取踊り：その継承と変遷

HANATORI-ODORI(DANCE)AT KAWAOKU  
DISTRICT SHIMANT TOWN,  
KOCHI PREFECTURE IN JAPAN :  
THE SUCCESSION AND TRANSITION

岩 井 正 浩  
MASAHIRO IWAI

## 1. はじめに

1955年代以降、日本は高度成長政策のもと驚異的な経済発展を遂げてきた。しかし一方では、人口の都市集中化に伴い過疎・過密現象が全国的規模で広がった。地方から都会へ若者達が転出していった頃、《哀愁列車》、《別れの一本杉》、《リンゴ村から》、《東京だよおっ母さん》、《南国土佐を後にして》、《早く帰ってコ》、《夕焼けトンビ》、《ぼくの恋人東京へいっちち》や《あゝ上野駅》など、東京をはじめとする大都市に関する歌が数多く生まれた。そして《王将》のように、「明日は東京に 出ていくからは なにがなんでも 勝たねばならぬ」といった悲壮感まで漂わせていた心情の裏には、農業不振により地域住民が安定した生活を求めて都会に出ていくという構図を作り出し、人口の都市集中化とそれに伴う地域の過疎化現象を引き起こした。地域住民は地域社会の崩壊に直面し、ムラおこしやリゾート化に命運を賭けてきた。しかし、近年の日本経済が地域間格差を拡大させ、キャピタルゲインを都市圏に集中させる結果を黙認してきたことは、地域の若年労働力を定着させることをより困難化させてきた。このように地域の伝統文化は、政治・経済といった巨視的な視野の中にもろくも崩壊の速度を加速させてきたのである。

一方、NHKが高視聴率をあげたテレビ番組『ふるさとの歌まつり』（1967～1969年）は、地域をテーマにし、地域重視・地域主体の感を抱かせた。しかしその本質は、都市住民、なかんずく離村し都市に住まざるを得なくなった旧地域住民への代償といえるものであった。村落共同体の過疎は、このようにして定着させられていったといえる。

1954年、アメリカと日本が締結したMSA協定は、アメリカの余剰農産物を日本に輸入するといったもので、農村に対する打撃が離村・都市集中を引き起こした。そして農村破壊が過疎を引き起こし、過疎が更に農村破壊を促進させるといった構図の元で、日本の農村基盤は急速に衰え、その後も食料自給率は低下の一途をたどってきている。日本国内での生産性が低下したのは、高度成長政策で第一次産業をないがしろにしてきた結果である。豆腐、納豆、醤油など日本人の主

要食物である大豆はわずか8%の生産しか行われていなく92%が輸入であり、小麦12%、砂糖28%、油脂類13%という自給率の低さは将来に大きな課題を突き付けている。<sup>(註1)</sup>そして低価格の木材、椎茸をはじめとする農産物の輸入は地域農村の衰退に拍車をかけて来た。現在はTPP(環太平洋戦略的経済連携協定(Trans-Pacific Partnership))が地域の第一次産業に大きな打撃を与えようとしている。2013年3月に訪れた沖縄県南大東島製糖工場の大きな煙突には、次のようなメッセージが書かれていた。

「さとうきびは島を守り、島は国土を守る。」

さとうきび栽培に生活のすべてを託してきた島民は、TPPを死活問題だとして反対しているのである。一方、オーストラリア、アメリカ、カナダ、フランス、ドイツなどの欧米先進国の食料自給率は高い。つまり自国の第一次産業が健在である。<sup>(註2)</sup>

村落共同体の中で、祭りは神事・娯楽にわたって地域住民の中にがっちりと根を下ろしてきた。しかしその祭りは地域が限界集落化していく中で衰退・変容・断絶を余儀なくされてきている。本稿は限界集落化の中で、地域住民のたゆまない努力にもかかわらず変容しつつある川奥の祭りを、時系列的に捉えることが目的である。

## 2. 窪川町について

旧窪川町は高知県高岡郡の西南部に位置し、標高200～500メートルの盆地状の台地部と土佐湾に面する海岸部に大別される。1955(昭和30)年に窪川町、東又村、松葉川村、仁井田村、興津村の1町4村が合併して高岡郡窪川町となった。その後、2006(平成18)年3月に旧幡多郡大正町、旧十和村と合併して四万十町となっている。旧窪川町は四万十川中流域に位置し、仁井田米は全国的にブランド米としての評価が高い。土地利用状況は森林・原野が総面積の約83%、農地は10%でその内水田が90%を占めている。近年はショウガ栽培が盛んだが、イノシシや鹿が繁殖し木材や農産物の被害が増えてきている。気候は興津や志和などの海岸部は温暖だが、盆地地域は寒暖の差が大きい。人口は2013年7月31日現在で、男性：8,913人、女性：10,014人の計18,927人、8,781世帯<sup>(註3)</sup>である。ブランド総合研究所が実施している全国3万人による自治体の通信簿である第8回「地域ブランド調査2013年」では「四国No. 1」の魅力ある町となっている。

歴史を概観すると、室町・戦国時代に土着の豪族(仁井田五人衆)が出現する。彼らは窪川氏、東氏、西氏、西原氏、志和氏と呼ばれていた。五人衆が最も勢力を振ったのは戦国時代中期までで、その後は長宗我部元親の支配に代わった。関ヶ原の戦いによって長宗我部が崩壊し、代わりに山内氏が土佐国に入場すると、窪川は交通の要衝として山内姓を与えられた家臣が守護職として6代160年続いた。この間に新田開墾が積極的に行われ、米作が発展している。本稿で取り扱う川奥は、旧松葉川村に属し、現在の旧窪川町北部、渡川(四万十川中流域)に位置し農業が主産業である。以前はこの地域の最奥部の森ヶ内部落に営林署(森ヶ内斫伐事務所)が1908(明治41)年に設置されていたが、現在は外国木材の輸入で採算が合わなくなり、若者の離村も進み山林は間伐さえされない状況を呈してきている。

旧窪川町の神社は県社の高岡神社、郷社の志和天満宮、興津八幡宮はじめ村社30、無格社50を

数える。<sup>(註4)</sup>「仁井田五人衆」「五社大明神」として知られている県社・高岡神社は、826（天長3）年に福円満寺（現在の岩本寺）が右脇寺として創建された時にはすでにあり、当時は五社ではなく一社であった。その後福円満寺を建てた弘法大師がこれを五社に分け、それぞれ伊予河野氏の氏神を祀り、さらにそれぞれに不動、観音、阿弥陀等の仏を祀って神仏一体の五社明神とした、とされている。五社明神は、戦国時代は「仁井田五人衆」の崇敬神として信仰され、それぞれの領地から氏子の代表が出て、穀物を捧げ、仁井田全体をあげての大掛かりな例祭が行われた。<sup>(註5)</sup>伊予河野氏の氏神を祀ったことや、幡多地方に隣接していることから伊予の伊達文化、幡多地方の一条文化そして津野山文化がここ窪川町で重層的に成立している。四国八十八カ所の第37番札所岩本寺は、前の36番札所青龍寺と次の38番金剛福寺までの距離が長いと宿泊地として重要な位置を占めている。志和にはこれを詠んだ次の花取踊り歌が残されている。

追いつけよあとの子遍路よ 仁井田の五社で 待ちよる<sup>(註6)</sup>

町田佳聲が昭和37年に収録した『日本労作民謡集成』の仁井田村の田植歌にも、

ソリャお前 それが違うたら 足摺さんで 待ちよる<sup>(註7)</sup>

が掲載されている。「足摺さん」は、四国八十八カ所第38番金剛福寺のことである。そして旧窪川町の花取踊り歌は、田植歌と共通性が強いばかりではなく、五七七四という古い詞型をもっている。<sup>(註8)</sup>学校の統廃合が過疎化を速めて来ている。

1948（昭和23）年 組合立高南中学校廃校

1974（昭和49）年 仁井田・松葉川・東又・志和・川口・旧窪川中学校を廃校、新設窪川中学校に統合。松葉川山小学校を米奥小学校へ統合

1977（昭和52）年 檜生原小学校を川口小学校へ統合

2011（平成23）年 志和小→東又小、若井川小→窪川小、家地川小→北の川小（旧大正町）にそれぞれ統合して休校

2012（平成24）年 丸山小・口神ノ川小を窪川小に統合して休校

今後の統合計画として、2012年度以降 興津中→窪川中、米奥小→七里小、川口小→窪川小、影野小→仁井田小とそれぞれ統合されることとなっている。<sup>(註9)</sup>

なお、本稿では通時的比較研究のため、旧名および使用された言葉を使用し、引用は年月日および時間の漢数字をアラビア数字に統一する他は原則として原文に従った。

### 3. 通時的変遷にみる川奥の花取踊り

花取踊りは旧暦7月27日夜の山ノ神での行事に引き続き、28日には白河神社での奉納の後、川奥の集会所前で行われていた。1970年版『窪川町史』には、

奉納踊りのときは、氏神の境内に十四枚の蕙で七角形の踊り場を設け、入口に櫛を立てしめ縄を張り、太鼓の音頭で太太刀小太刀で一列になって左回りに踊る。踊りは十四種類もあって、土一升の祈願土一劫の祈願という念のこった踊りである。<sup>(註10)</sup>

と踊り方が紹介されている。また2005年版『窪川町史』では、ほぼ同じ内容の記述があり、最後に

川奥は昭和40年(1965)6月18日、県の無形文化財として指定された。<sup>(註11)</sup>〔岩井註：「土佐の太刀踊り(川奥の花取踊)」

とある。そして写真には、烏帽子や烏毛、たっつけやタクリでの踊りが掲載されている。

踊り手減少のため、地元が「川奥の花取踊り」の高知県指定無形民俗文化財の指定の取り下げを申請してきているという情報は、窪川在住の民俗研究家である林一将氏から2011年11月2日にお聞きしたものである。そして2010年には祭りの担い手の高齢化と減少のため、やむなく「山の神」を集会所横の平地に下ろしている。

①橋詰延寿氏の「土佐の太刀踊」に見る「川奥の花取踊り」論(抜粋)<sup>(註12)</sup>

橋詰延寿氏の論考は1960年に発表された記録で、以下はその抜粋である。

この川奥部落は二十八戸である。その部落から小川を一つ距てた対岸の山が、山の神を祀るところである。松明は参道に適當の間をおいてたててある。曲り角には必ずある。(中略)松明は一戸当り大体七本である。だから全部で百九十六本になる。旧暦7月27日の宵にここで花取踊を奉納し、翌28日は昼間白河神社で奉納する。

昔、野獣がでて来て作物をあらした。その被害がひどいので困り果てた川奥の部落民は神にうらないをした。すると大山神のたたりであるとわかった。農民達はさっそく神意を慰めるために永久にこの踊を奉納することを誓い、山野にはびこる野獣から作物を護ってもらいたいと祈願した。窪川城主の許可をうけて花取踊をするようになったという。だから400年前からと伝承されている。

現代から見ると450年前となる。橋詰氏はこの川奥の花取踊りの最大の特徴を「夜の踊り」だとし、次のように述べている。

8時10分になると参拝後、直ちに踊になる。三十人も集まるといっぴいになる庭である。周囲はウツソウとした杉木立。あかあかと燃えあがる松明の火に照らされて花取踊がはじまる。本格的な踊は明日、この場所で12時から、更に白河神社へ行く。

練習については、

昔は一軒一軒順に廻って練習をした。それで二十八軒あると大体一ヵ月もかかった。しかし今は一週間程度の練習で、庭の広い家とか広場で練習する。

翌9月4日(旧7月28日)の行事と踊り子の衣裳および踊りの次第については、

部落の方から太鼓の音につれ掛声勇ましく花取踊の一団が登って来る。十四人中、太鼓打ちは二人。片バチのシメ太鼓である。今日は太鼓にも金銀の紙をはり、バチにも花房がついている。頭は一樣に雉、山鳥の烏毛の冠、それに五色の紙を配して白鉢巻を幅広くしめている。上衣は全部白。これに色の襷をかけ、さらにタクリをつけている。(中略)下衣は山袴(カルサン)、白足袋とワラジ、持ちものは大小の太刀、ただし小太刀組の冠はエボシ、その先には花をつけ、太刀のつかにも花をかざる。腰には扇子をさし、万一、太刀をおとした時、扇子をとって太刀の代用とする。

山の神で三番そうを踊ると、シオリさまに参拝に行く。これは六キロ奥の海拔九百メートルの柴折山に祀る祖神を勧請してあるところである。そこには一本の椿があり碑が立っている。

る。この椿に五色の紙が張られている。ここで参拝がすむと部落の氏神白河神社に入って休憩をする。本格的の踊りは午後2時から2時間を要する。

そして「土一劫の踊」について次のように述べている。

土地では土一升（生）の祈願といい、土一劫（合）の祈願ともいう。（中略）永久に絶やさないという祈願は、永劫の劫だろう。それで土一合の祈願などともいう。（中略）この花取踊のあとで婦人達がコッパ踊りやコリャセがあり、子供相撲があつて解散する。

## ②高木啓夫氏の「川奥の花取踊り」論（抜粋）<sup>（註13）</sup>

高木啓夫氏は、1974（昭和49）年に実施した調査に基づき、2013年7月に「川奥の花取踊り」を論じている。これは橋詰氏の調査から14年後である。高木氏は花取踊りを「山ノ神への豊作祈願」とし、祭りについて次のように論じている。

正午、踊り子の太鼓役二人がそれぞれの家を出て、太鼓をたたきながら山ノ神へと向かう。これが今日の祭り開始の合図である。踊り子も、氏子も山ノ神へと山道を上る。境内の大松明は昨夕と同じく焚かれる。山ノ神への特別な供物として、太刀が供えられる。太刀といっても檜の棒である。（中略）各人山ノ神を拝み終えたと、昨夕と同じく三、四番ほど花取踊りを踊る。踊り終えたと、山道を下り約八〇〇メートル先にあるシオリ山の裾にある「シオリ様」を拝み、産土神社白河神社へと向かう。ちなみにシオリは柴折り信仰にもとづく「柴折り」であろう。公会堂に着くと「カドイデ」といって酒肴が振る舞われる。カドイデは門出である。（中略）カドイデが一区切りすると、「トー渡し」の行事が行われる。本年のトーニンが、来年にトーニンの役を務める人が手にする大盃に酒を注ぐ。（中略）通常「頭屋渡し」といい、県下の祭りに多く見られるが、一つ盃の廻し飲みは特記すべきである。

太鼓打ちと大小太刀については、

太鼓打ちは二名であるが、一名は頭にカブトといって、烏毛のかぶりものを被る。もう一名は烏帽子を被る。衣裳は二人とも黒の袴に白上着で、襷掛け、背中にタクリを数本垂らす。以前は手に手甲、下半身は裁っ掛け袴に脚絆を着けていたが、これが今のような袴姿が見られるようになったのは明治の末のことだという古老もいる。（中略）足は白足袋に飾りつけた草履であったが、藁の上では素足である。大太刀も衣裳は太鼓と同じであるが、カブト（烏毛）を被る。太刀を置き、鎌でも踊る。小太刀も太鼓打ちと同じ者もいるが、裁っ掛け袴の者もあり、烏帽子を被る。

とし、歌詞は1964（昭和39）年の調査結果と比較して多少の差異を認めている。高木氏は平成24年の花取踊り奉納前に「山ノ神を平地に移したい」という地元の申し出について、これは『空文化する文化財保護条例』であり、移転が「神社庁と合意の上であれば止むを得ない」としつつも、

しかしよく考えてみれば、山ノ神は土のある限り花取踊りを奉納すると祈誓した聖地であり、芸能起源を演じて伝える歴史的軌跡でもある。（中略）文化財自体も文化財保護条例も空文化している。文化庁の明確な指針は示せないのか。

と問題提起をしている。永年、文化財保護に携わってこられた高木氏の苦渋に満ちた発言であり、徳島県で文化財保護に携わってきている私にとっても考えさせられる現実である。ここには地域

産業の不振、過疎化による氏子の減少、神職の高齢化で僻地山間部の移動や奉納芸の披露さえままならぬ状況がでてきているであり、川奥だけの問題ではない。祭り、民俗芸能、年中行事の衰退・変容にとどまらず断絶に見舞われている地域も少なくなく、今後も発生し続けることだろう。前述した学校の統合・廃校も地域におけるコミュニティの衰退・崩壊に拍車をかけ、限界集落化を加速化させてきている。国レベルの対策が取られない限りこの状況は止められるものでないことは明白である。

#### 4. 花取踊りの音楽的特徴

##### ①歌詞

2013年に収集した歌詞は以下の通りである。ただ、歴史的推移で多少の差異が認められる。以前は踊るのに2時間も要していた。

1. メ切り：ヨー此処開けよヨー大和男力（オツキ）の ヨー開けずば昇りヨーはね越す
2. 入刃（イレハ）：ヨーはね越してヨー身にはこずとも ヨー此方寄れ絹のヨー棲着せよ
3. 庭被い            へい、へい、ヤーツ。
4. 柄突（エツキ）：ヨー俺どもわ ヨー初（ウイ）の花取り ヨー悪しくも良しくもヨーおしよなれ
5. 車太刀：ヨー花取りはヨー七日諸事を ヨーけがすな村の若衆（ワカイシュウ）
6. 三つつくなみ：ヨー打太刀（ウチタチ）のヨー袖が破れて  
        ヨーお方に何と言われよ ヨー其りゃお前 ヨー物とおしよなれ ヨーもがりにかけたとヨーおしよなれ
7. 脇ばさみ：ヨー大野見のヨーこぶが瀬にこそ  
        ヨー八重玉草がヨー浮きよる ヨー其れ取りて ヨー八重にむすびて ヨー流すぞ下のヨー瀬でとれ
8. 逆手鎌：ヨー窪川のヨー土井の前を ヨー流れる水はヨー良い酒  
        ヨー良い酒にヨー菊を散らして ヨー想（オモウ）女の酌でヨー飲まいでか
9. ようろ：ヨー津野様のヨー召したかぶとに ヨー咲いたる花はヨー何花  
        ヨー何花とヨーおだて下（オロ）して ヨー瀬良に勝るヨー八重菊
10. 違鎌：ヨーちょちょとヨー鳴くは千鳥か ヨー鳴かめは宮山（ミヤマ）のヨーおしどり  
        ヨーおしどりにヨー舞を舞わして ヨー千鳥の酌でヨー飲まいでか
11. 天井車：ヨー梅七つヨー杷（ビワ）の房折り ヨー是れ二十一 ヨーことづけよ  
        ヨー其りゃお前ヨーおれも二十一 ヨーどの二十一のヨー事ぞへ
12. 違いなぎなた：ヨー面白やヨー国を廻れば ヨー白すげ傘をヨー手に持つ  
        ヨー手に持てばヨー右の御手に ヨー左のお手はもどろうな
13. 切り分（キリワケ）：ヨー早よ踊れよヨー婦（い）のをや友達  
        ヨー都の里にヨー長居（ナガオ）り ヨー此の里にヨー長き居りすりや ヨーよし無い事にヨー名が立つ
14. ひざつき：ヨーわしや帰る（イヌル）ヨーやがて来やと  
        ヨー言うてはお手をヨーなげかけ ヨーそりゃお前 ヨーお手はなげかけ ヨー足おば寄れつヨーもつれつ
15. 引刃：ヨー引け引き木ヨー廻れ小茶うす ヨーざんざとおろせヨー小葉茶屋



## ②音楽＝旋律、リズム

『日本民謡大観四国篇』には、昭和37年に録音された花取踊りの楽譜2編（《メ切り》と《脇挟み》）が掲載されている。<sup>〔註14〕</sup> また『復刻 日本民謡大観四国篇』には、「メ切り、車大力、脇挟み、逆手鎌、養老、違い鎌、引きや」の7曲が収録されていて、解説書には次のように記されている。

この「花取踊」にうたわれているものは、本来は「念仏踊」の一種で、「遠碧軒記」という書に「土佐踊と言ひて鉦をたたき念仏あり、これを踊といふ。後には脇差を抜きて切り合ひ勇み踊る」とある。これによると、「念仏踊」が根元で、それが「花取踊」にも「太刀踊」にもなったことになる。唄は新旧いろいろにうたわれるが、この窪川町川奥の「花取踊」のように、詞型が五七七四型のものが古調で、他のところでも古調はこの詞型及びその変化（字足らず）が多い。しかし、同町仁井田や平串でうたわれる五七七四型の「田植唄」と歌詞は共通のものもあるが、曲節については共通点は見当らない。結局、＜なむあみどおや…＞で始まる「念仏風流小歌踊」を基本にして、種々の唄や歌詞を加えていったとみる方がよさそうである。なお「車大力」「脇挟み」などは「太刀踊」の種類であって、曲名ではない。唄はいずれも＜オンヨーなむあみどおやなむあみどおヨ＞の序で始まり、主節は楽譜603にある「メ切り」と、それとは少しだけ異なる「脇挟み」のどちらかの曲節によってうたう。歌詞は五七七四の対になった二連をうたっている。<sup>〔註15〕</sup>

録音されたCDから採譜した2曲を以下に示す。『日本民謡大観四国篇』の楽譜とは異なる箇所も多い。<sup>〔註16〕</sup>

〔楽譜－1 川奥の花取踊り：メ切り。脇挟み〕（羽石彩子採譜・岩井正浩校閲）→巻末

## ③踊り方

武田邦重氏の御尊父様である武田祐弥氏が記した手帳には、「花取踊りの踊り方」が走り書きで記録されている。その一部を掲載する。

川奥花取太刀踊―昭和40年6月18日 高知県無形文化財指定

しめ切り入場

太鼓打を先頭に太太刀、小太刀と交互にしめの前に整列して、神職の御払を受けて入場を始める 席順は太鼓打。音頭。脇音頭以外は話合又は抽籤に依って是れを定める  
但し音頭は自分のつれる小太刀を自選する事が出来る。

「此所開けよ大和男力（ヤマトオリキ）の 開けずば登りはね越す」

の歌詞で始める。ヨーで音頭は太鼓打ちと並び右に太刀をかざし「はね」で音頭足を踏んでしめを切り「こす」で右に退る時サーサを掛ける 太鼓打ちは二人同時に入場。音頭はサーサから左に払い、次に右に払う時に入場する。後は一人づつ右に払ふ時に入場し、左りに払う時に次の薙にうつり左廻りに一周して全員入場を終りサーサを掛ける。

## 1. 入刃

はね越して身には着ずとも こち寄れ絹のつま着せよ

左り右と交互に三回切り。太刀をすけ右ひざを立て左りひざをついて座り、右足を右に開き太刀を立て、次は左足を立て、右ひざをついてトントントンと左右の手を交差して立ち左り右と三回づつ切り。かげを使って、又左右と三回づつ切って終る。音頭は三回切って「シツ」と声を掛け太刀を切り下した儘前にて外向に座り。中の三切は外の者と向合って踊り「シツ」と声を掛け元の座に戻りかげを使って、終りの三切りは皆と同じく踊る。此の踊は大太刀のみで踊り小太刀は休む。音頭は地唄の終り「ヨー」で太刀を右に高くかざし、音頭足を踏んで。「つま」で前にとび直ちに音頭足を踏んで戻り「着せよ」でサーサを掛ける

この記述には踊り方ばかりではなく、音頭の要領も記載されており当時の「花取踊り」の仕様が明瞭に把握できる。1. 入刃の次からは2. 庭拂、3. 柄突き、4. 車太刀、5. 三つづくなみ、6. 脇ばさみ、7. 逆手鎌、8. ようろう、9. 違鎌、10. 天井車、11. 違長刀、12. 切り分け、13. ひざつき、14. 引刃、の順に踊り方は続いている。記述年は最後のページに「昭和50年9月3日（旧暦7月28日）」として踊り子16名の名前を追記していることから、この手帳への記述は1974年であり、中平敏久区長から提供していただいた以下に掲載する同氏ご子息である武田邦重氏蔵の写真（巻末参照）も同年の1975年ではないかと推測される。この写真からは、太鼓打ち2名、大太刀（烏毛）、小太刀（烏帽子）、白上着にタクリ、そして四方を注連縄で囲み、ゴザの上で円形になって踊っている様子が映し出されている。

【写真－1、2、3、4「1975年当時の花取踊り」】→巻末。写真提供：武田邦重氏

#### ④1993年の川奥花取踊り

1993年の川奥の祭りは旧8月28日（今年は9月14日）であるが、人手不足のため9月11－12日に変更された。

宵宮は「お山の祭り」で、50メートルほど登った山で行われた。松明を各家から4～5本（26家中24戸）が出し、山の小道に突き刺して燃やしていた。そして小さな祠（山ノ神）の前の広場で5～6名で踊った。12日は12時から昨夜の場所で祭りと「花取踊り」が行われた。その後昼食をとり、麓の集会所前で14時30分から16時まで14庭を舞い、終了後は子ども相撲が即席の土俵を作り行われた。

踊り方～各人1枚ずつの蓆の上で踊る。足袋と裸足、衣裳は平服、タクリ、襷、鉢巻、たっつけ。以前は白い着物に袴、襷を結び、烏毛・烏帽子であったが、烏毛は山鳥がいなくなり烏毛はなくなった。

注連縄と神棚はなく、担い手は男のみの大人9人で、踊り場は山の中腹の大山祇神社（山ノ神）と集会所前の2カ所であった。

【写真－5、6、7、8「1993年当時の祭りと花取踊り」】→巻末。撮影：岩井正浩

#### ⑤2013年の川奥花取踊り

川奥地区の小中学生は16名（以前は300名）、米奥地区は小6、中2、保育1、人口は51名。（米の川と米奥で川奥）である。米、ショウガが主産業で林業は自由化で行われなくなった。今年は



日照りでショウガがやられ、イノシシや鹿の被害も多く、捕捉のため罠を仕掛けるがなかなかとれなくなっている。イノシシは皮を剥がなくても食用になるが鹿肉はまずいと地区の方々は語っていた。

3年前（平成23年）より「山ノ神」は集会所横に移されている。集会所に保管されている古文書の入った箱の表には『奉 大山祇神社』と書かれ 中にしまっている綴帳には明治2年の記述があり、「花取踊り」が明治初期にはすでに踊られていたと思われる。また公民館前の広場の2隅には「奉献皇御孫命」と「奉献大山祇神社」と書かれた2つの幟が立っている。

氏子は12時から枝折山（800メートル）の中腹シオリ（柴折り）様へ三々五々お参りに行く。集会所では昼食としての「カドイデ」が始まった。（本来はこの時間から「山ノ神」へ登る。日程は旧7月28日だが、日曜日（本宮。前日宵宮）となっている。）

〔写真－9、10、11、12「2013年の花取踊り」〕→巻末。撮影：岩井正浩

2013年における花取踊りの歌詞は扇子に書かれていて、それを参考して歌っていた。

- |         |         |              |       |
|---------|---------|--------------|-------|
| ①しめ切り入場 | ②入刃     | ③庭払い（ヘイヘイヤー） | ④柄付き  |
| ⑤車太刀    | ⑥ミツヅクナミ | ⑦脇ばさみ        | ⑧逆手鎌  |
| ⑨ようろう   | ⑩違い鎌    | ⑪天井車         | ⑫違い長刃 |
| ⑬切り分け   | ⑭ひざ付    | ⑮引き刃         |       |

リズムは4パターンあり、速度は ♩＝88程度であった。

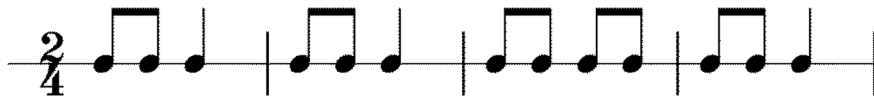
楽譜2＝「リズム1」



楽譜3＝「リズム2」



楽譜4＝「リズム3」



また今年花取踊りの中で歌われた旋律の1つは次の通りであった。

## 楽譜 5 = 「花取踊りの旋律」採譜：岩井正浩



この中で今年演じたのは、④、⑤、⑥、⑦（前半） ⑪、⑬、⑭、⑮（後半）で、演目の間では踊り方の確認をしつつ臨んでいた。踊り手は本来、大太刀7、小太刀7、締太鼓2であるが、今年は大太刀3、小太刀2、締太鼓1で、服装は平服であった。⑭と⑮は連続で右回り1周し、最後は集会所横の山の神に向かって一礼し終了。

踊り・歌の指南は中平伸幸氏（昭和38年生）が行っていた。（括弧内は所要時間）

13:34—46（前半）—休憩—13:54—14:06（後半）

④柄付き（2:10）⑤車太刀（2:07）⑥ミツヅクナミ（2:40）⑦脇ばさみ（2:50）

⑪天井車（2:35）⑬切り分け（2:55）⑭ひざ付→⑮引き刃（5:40）

花取踊りが終了すると、広場に放射状に敷かれた藁の上で相撲が始まった。以前は子どもの小遣い稼ぎで100円程度であったと言われているが、今年は15,000円の寄付で、勝った子どもには500円、負けた子どもには300円褒美をあげていた。

## 5. 継承における課題と展望：川奥の花取踊りが語るもの

四十万十川流域の集落は現在も限界集落化が進行している。旧西土佐村西ヶ方では五ツ鹿踊りや花取踊りが、旧東津野村大野見でも花取踊りが断絶している。（後日、2013年に復活）また旧十和村地吉ではご不幸が重なり、五ツ鹿踊りの3名が祭りに出られなくなり、この芸能を2013年度は中止している。高齢化は今後とも芸能の担い手を失い、変容を余儀なくさせていく。この現象は地域住民にとってなすすべもなく、彼らの努力だけでは解決できない問題を抱えている。地域住民の生活環境を保証しない限り数年後には多くの地域で祭りや芸能が無くなっていくことは確実である。花取踊りにみる子どもと大人との交流、地域の教育力は、コミュニティの中核としての役割を果たしてきた。小学校が統廃合され、地域産業が打撃を受け、教育・医療などが都会と大きな格差を生み出している現状では、子どもたちが地域に希望を見いだせない。1993年から20年を経て2013年に実施した「高知県四十万十川上・中流域のくらしと音楽の通時的研究」は、大きな課題を突き付けられる結果となっている。

最後に、限界集落化していく中で最大限の努力をしつつ伝統を継承してきている川奥地区20年前の中平暮幸区長、中平敏久現区長、「花取踊りの踊り方」と以前の貴重な写真を提供していただいた武田邦重様をはじめ、暖かく調査にご協力を惜しまなかった1993年当時と2003年の地区住民の皆様感謝いたします。この研究は「平成24～25年度愛知淑徳大学研究助成・特定課題研究」の一環として実施したことを付記しておきます。

## 註釈

1. 農林水産省「平成24年度諸外国自給率カロリーベース」より)  
<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/0310.html>
2. ibid.,「1969年度に79%であったカロリーベースの食料自給率は(中略)2010年度も猛暑による国内農業生産の減少などを背景に39%へと低下し、11~12年度も横ばいだった」
3. 「四万十町通信90号」四万十町企画課、2013.9
4. 澤本健三『市町村別 日本国総覧』社団法人帝国国民教育協会 p.30 1934
5. 窪川町史編纂委員会『窪川町史』 p. 9 1970
6. 志和天満宮花取踊り保存会 p.32 1974
7. 町田佳聲『日本労作民謡集成一生きていた働く人たちの歌声』  
 ビクターレコード解説 p.18 1964
8. 岩井正浩・他「窪川町志和の秋祭り」民俗音楽研究 第13号 1993年で論述。
9. 窪川町教育委員会・四万十町教育委員会 (<http://kochischool.net/kubokawa.htm>)
10. 窪川町史編集委員会『窪川町史』 窪川町 p.255 1970
11. 窪川町史編集委員会『窪川町史』 窪川町 p.962 2005
12. 橋詰延寿「土佐の太刀踊」民間伝承 第29巻第2号 六人社 pp.78-81 1965.7
13. 高木啓夫「川奥の花取踊り」土佐民俗 第96号 pp.1-10 2013.7
14. 日本放送出版協会編『日本民謡大観四国篇』p.453 1994
15. 日本放送出版協会編『復刻 日本民謡大観四国篇』CD音源 p.100 1973
16. 註14の楽譜とは音域など差異が見られるが、音源通りに採譜を行った。  
 「メ切り、車大力、脇挟み、逆手鎌、養老、違い鎌、引きや」から「メ切り、脇挟み」。  
 「車大力、逆手鎌、養老、違い鎌、引きや」は「メ切り、脇挟み」のどちらかの旋律で歌われる。

## [参考文献]

- 岩井正浩「地域文化の伝承と創造～十和村「四万十川まつり」にみる伝統の継承」  
 音楽教育学の展望Ⅱ・上 音楽之友社 pp.113-128 1991
- 岩井正浩「村おこしと民俗芸能」民族音楽叢書 No.10 東京書籍 pp.39-63 1991
- 岩井正浩「四万十川上・中流域のくらしと音楽序説」  
 日本の音の文化 第一書房 pp.235-260 1994
- 岩井正浩「盆踊りにおける伝承と教育」季刊音楽教育研究-23 pp.104-115 1980
- 岩井正浩「民俗芸能の実践と教育課程」季刊音楽教育研究-30 pp.76-85 1982
- 岩井正浩「宇和海一帯の盆踊り～衰退・復活と現代的意味」  
 民族芸術-1 pp.170-176 1985
- 岩井正浩・他「高度情報化に伴う民俗音楽・民俗芸能の均質化と変容」  
 放送文化基金研究報告-16 pp.321-326 1993

岩井正浩「音楽行動としての祭り～現代人の＜癒し＞行動」

神戸大学発達科学部研究紀要—5—2 pp.101-116 1998

武藤致和編『南路志闊国之部下巻』(1813年 翻刻版) 高知県文教協会 1960

鹿持雅澄『巷謡篇』(1842年 翻刻版 藝能史研究會編) 日本庶民文化資料集成 第5巻

歌謡 三一書房 1973

高知県『高知県史 民俗資料編』 1977

岩井正浩「四万十川中流域窪川町のくらしと音楽～1990年代の花取踊りを事例として」

愛知淑徳大学論集 教育学研究科篇第2号 2012

岩井正浩・他「四万十川上・中流域のくらしと音楽 [IV] 高知県高岡郡窪川町①

神戸大学発達科学部研究紀要第1巻第1号 1993

[楽譜-1 「 $\nearrow$ 切り/ $\nearrow$ 脇挟み」]

「花取踊り」より ㄅ 切り、脇挟み

高岡郡窪川町川奥

採譜：羽石 彩子

校閲：岩井 正浩

校閲: 岩井 正浩

♩ = 168~184

唄

太鼓

6

唄

太鼓

11

唄

太鼓

16

唄

太鼓

21

唄

太鼓

26

唄

太鼓

30

唄

太鼓

脇挟み

accel.

1.

2.



写真－1  
「1975年当時の花取踊り」



写真－2



写真－3



写真－4  
写真－5  
「山の神」(1993年)



写真－6  
「山の神への道」



写真－7  
「山の神の前での花取踊り」



写真－8  
「集会所前での花取踊り」



写真－9  
「シオリ様参拝」(2003年)



写真－10  
「集会所横の山の神」



写真－11  
「集会所前での花取踊り」



写真－12  
「集会所前での花取踊り」

